

齢期は喪失体験の連続である。仕事を失い、収入を失い、髪の毛を失い、歯を失い、肌の張りや艶を失い、視力、聴力、食欲、性欲、運動能力、持久力、記憶力、思考力、抵抗力など生を前進させていた個人的能力のみならず、親、きょうだい、配偶者、友人、知人など身近な人間関係まで死という抗しがたい力によって失っていく。その虚しさや寂しさ心細さから身を守る方法は喪失に抵抗するのではなく、喪失を受け入れることしかない。喪失を受け入れる態度を疾病に適用すれば、症状を訴えない高齢者の姿が浮かぶ。美德として我慢強い高齢者もいれば、感覚の鈍麻によって我慢強く見える高齢者もいる」そして、こう締めくくった。「身に起こる喪失の連鎖を諦観でやり過ごすことを学習した高齢者の存在を忘れてならない」²⁾と。

V 患者理解とそのための「知」のあり方

われわれは患者を理解し、寄り添い、患者が新たな人生を歩もうとすることを支えようとしてきた。しかし、患者の喪失感に気づかなければ患者との



ワンポイント

アドバイス



喪失感を長期に抱えもつ、患者の特徴や対応のポイントを教えてください

喪失感を長期間抱えもつ患者に時折巡り合うことがあります。そんな患者の特徴は失う前の状態にこだわっていることでしょうか。そして、明日への希望が見出せない場合です。

以前の状態にこだわる患者は、失う前との落差が大きいのかもしれません。しかし、知識不足や思い込みで落差が大きいと思い込んでいることもあります。自分の努力や判断の誤り、あるいは他人（医療者）の責任で失った場合はどこかで折り合いをつけなくてはなりませんが、それができていないときは前に進めません。また、支えてくれる家族や友人がいない、異なる立場（喪失してもできること）への転換が患者自身で考えられない場合も、喪失感を長引かせているようです。そして、プライドが高い人や自分を表出するのが苦手な人も同様です。いつもスマートな対応なので医療者側が安心していたら、患者は医療者に調子を合わせていただけで、実はずっと喪失感を抱えもっていたということもあります。

しかし、いずれ時が解決してくれます。患者自身が受け入れるのを待つことも大切ですが、現実を直視しできるだけ早く日常生活を取り戻す、規則正しい生活に戻す、必要な知識を伝授する、関心を他に向けるなど、患者の意識がそのことに集中しないようにする働きかけも大切です。

誰もがスパッと喪失感から脱却できるわけではありません。実際には一步一步進んでいくと思うのです。時には後戻りしながら、大切なのはそんな様子をじっと温かく見守り、支えていく眼差しではないでしょうか。

（中原宣子）